

「長方形のプリズム」

— 坂倉準三設計『飯箸邸』の記録と保存から

“le prisme rectangulaire”

from the documentation and preservation of
Ihashi-tei Residence by Junzo Sakakura

藤木隆男 — *1 金澤良春 — *2

Takao FUJIKI Yoshiharu KANAZAWA

キーワード：

活用的保存, 木造モダニズム住宅, コルビュジェ,
伝統的建築技術, /日本の美意識

Keywords:

Applicative preservation, Wooden modernism house, Le Corbusier,
Traditional technology of architecture, /Japanese sense of beauty

The purpose of this paper is to throw some light on the wooden modernism house “Ihashi-tei” that have not been enough noted in the modern architectural history, and to explain the characteristics of this architecture and space through our experience of preservation.

1. はじめに

坂倉準三設計の木造モダニズム住宅『飯箸邸』(写真1, 図1)のことは、必ずしも今まであまり良く知られていなかった嫌いがある。近代/モダニズム建築の論文や著作の中でもその存在や歴史的な位置づけは、程度の差こそあれ総じて大きく扱われてきたとはいえない^(注1)。私たち「旧飯箸邸記録と保存の会」^(注2)(以下「会」と呼ぶ)は、『飯箸邸』の解体、移築再建、転用保存に立ち会う機会を得て、改めてそこにコルビュジェを範とするモダニズム建築の特質を色濃く感じることが出来た。そしてそれは、単なる戦時統制下の一家風住宅ではなく、1937年パリ万博日本館(写真2)から神奈川県立鎌倉近代美術館(写真3)へ到る、既に世界的名声を博した若き正統派近代建築家・坂倉準三のコルビュジェ譲りの建築思想^(注3)の日本での最初の実践に他ならず、しかも極めて豊穡で完成度が高い重要な作品であることを強調したい。

2. 解体の危機を越えて——記録と保存活動の概要

私たちが『飯箸邸』(1941東京都世田谷区等々力。その後所有者が変わり『今泉邸』と呼ばれていた/写真4, 5)の解体が迫っていることを知ったのは平成18年夏、つい最近のことである。それまで限られた関係者、建築史家などの水面下の訪問や見学などはあったものの、保存活動としての具体的なものは、「NPO世田谷街並み保存再生の会」による見学会やシンポジウム、行政への働きかけなどに限られる。しかもその目論見、つまり世田谷区など公的機関による区内公共施設としての移築保存活用は極めて困難な情勢であった。

「会」結成に先立って行なわれたメンバー有志による「旧飯箸邸に関する緊急シンポジウム」(写真6)^(注4)開催が、危機感を持った私たちの最初の行動である。そこではパネラーや多くの参加者から『飯箸邸』の建築史的意義が語られ、保存の要望や建物実測調査/記録の必要性を訴える声が寄せられた。その前後、民間移築受け皿の模索^(注5),



写真3 神奈川県立鎌倉近代美術館
1951. 鎌倉鶴岡八幡宮境内

写真2 パリ万博日本館
1937. セーヌ河畔トロカデロ公園



写真4 今泉邸(旧飯箸邸)
1975年頃の旧飯箸邸;「大きな声」より

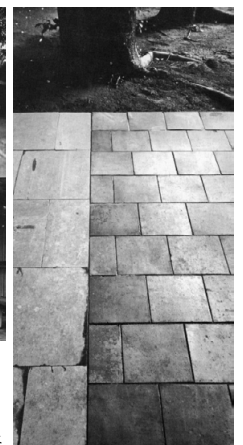


写真5 同上
テラスの敷瓦と仙台石/同上

*1 藤木隆男建築研究所

*2 一級建築士事務所 金澤建築研究所

*1 Fujiki Takao Atelier

*2 Kanazawa Architectural Design Studio



写真1 飯箸邸 「新建築1942.01—日本小住宅」より

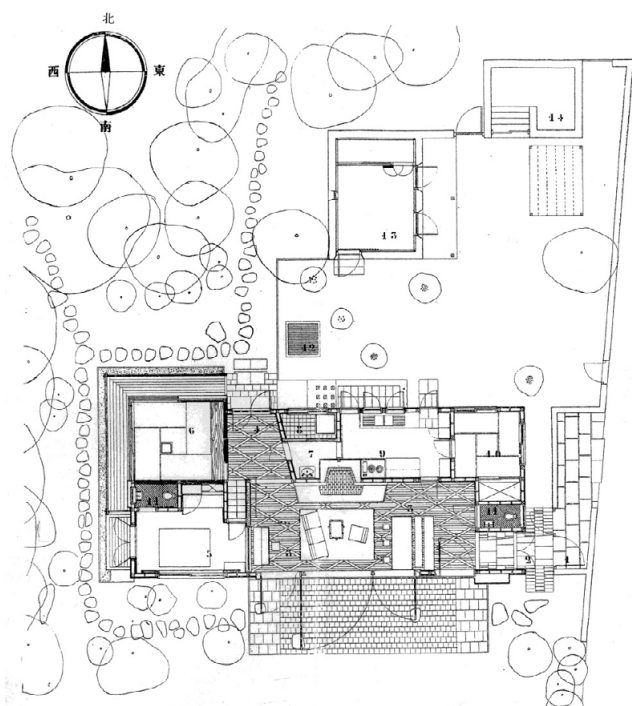


図1 平面図 「新建築」(前掲)より

JIAによる保存要望書の提出などが行なわれたが、年末に向けていよいよ事態は解体への後戻りの出来ぬ段階を迎えていた。現地/現状保存の次善の策としての「会」の判断は、まず少なくとも解体前後に詳細で正確な「実測調査」をし「記録」を残すこと、さらにどのような形であれ可能な限り、一部部材を含む実体としての建築や空間の「保存」の道を探ることであった。

1) 突然開かれた「活用的移築保存」への道

このうち後者の「保存」は、幸い坂倉アトリエ設計監理、「会」の実測に基づく技術サポートによるレストラン『ドメインヌ・ド・ミクニ』として、軽井沢追分のコンドミニウム内に実現(『新建築』2007.12)している。この「保存のカタチ」は、「会」からの切羽詰った要請を受けた建築家・坂倉竹之助氏(注6)の業務上の果敢な行動、人脈の広さ、そして何よりも父・坂倉準三への畏敬の念が一瞬に交差して成立した奇跡的な賜物である。それは明治村や江戸東京たても園などの「建築博物館の保存」や、三菱1号館、東京駅などの「復元的保存」とは違う、いわば「活用的移築保存」である。

つまり、異なる環境/敷地条件への解体移築、異なる用途への転用という限られた条件下で作品の実体や空間イメージの総体を可能な限り忠実に継承するというものである。「寒冷地」「商業的利用」などから来る物理的/時間的、用途/経済的制約条件の中で、必ずしも正確で完全な再建とは言えないそれは(注7)、しかしタイムリーかつスピーディーに「活用」されることによってはじめて可能になったいわば「ギリギリの保存」と言えよう。その「保存」の方法と成果に対しては、今後様々な角度からの評価が下される必要があるが、とにかく建築として、空間として再生されたのである。

2) 無我夢中の実測調査と今後

一方前者の「記録」についてだが、それを許容され機会を提供された所有者の今泉氏、開発企業/解体業者、活動への寄付・協賛者など関係各位の理解と協力、そして「会」の緊急アピールに馳せ参じた坂倉事務所OBや写真家、造園家など多くの関係者の建築への情熱と奉仕精神が結びついた、これまた稀有な出来事であった。つまりそれは身近な関係者が年末年始のタイトな引越し期間に限られて許された人海戦術による実測調査であった(注8)。さながらそこは獲物をもって集まった「飯箸邸実測梁山泊」の観を呈していたのである。

この移築を前提とし、建築の設計者の視線で貫かれた実測調査により得られた大量の記録、情報(B4野帖3冊分のスケッチ、写真やビデオ、部材サンプルなど)のデータ整理と図面化、それに基づく建築作品の分析や再評価など、正式な「調査報告書」の編集が今後の「会」の課題として残されている。報告書作りや建物分析/研究は、これらの記録が残ることにより正しく可能になるものであり、今後の飯箸邸/坂倉準三研究、モダニズム建築研究のための基礎的資料、物理的根拠のひとつとなるはずのものでもある。(例えば、現在ギャラリーA⁴で「坂倉準三・前川国男『木造モダニズム住宅展』2008.4.23~6.4)が開催されている。)



写真6 緊急シンポジウム
2006.9.15 工学院大学



写真7 解体調査中の旧飯箸邸
2007.1

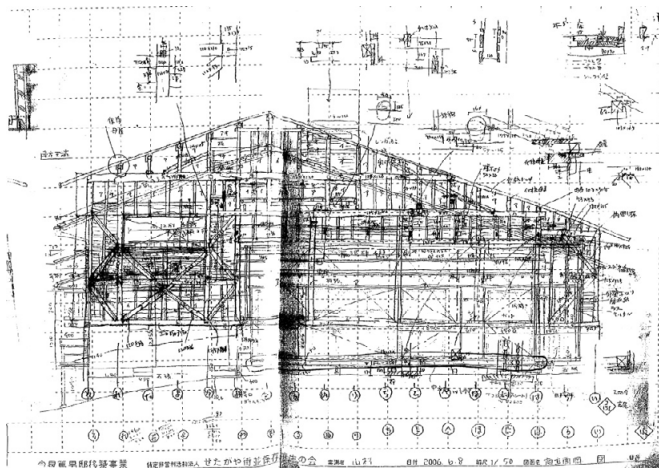


図2 南側架構全体軸組図(実測メモ)
「実測野帖2」より/2007.1.15 高尾, 金澤 記

3. 戦時統制下日本に誕生した木造モダニズム住宅『飯箸邸』

『飯箸邸』は昭和16年に竣工、東京帝国大学文学部美学美術史学科の坂倉の恩師；団伊能^(注9)の都内別邸である。コルビュジェの元で修行し、『1937年パリ万博日本館』でグランプリを得た坂倉準三が、39年自らの事務所を開設して41年に完成した最初期の作品である。しかも翌年1月号の『新建築』誌には「一日本小住宅」として既に発表されている。それは日中戦争から太平洋戦争に到る、あらゆる政治・経済、社会、文化活動が大きく制限されたいわゆる戦時統制下にあつて、一見時代の空気を色濃く反映したものの様に見える。しかし、このたびの実測調査や移築再建サポート、その後の様々な検討作業を通じて当事者に次第に浮かび上がってきたその印象は、むしろ「コルビュジェ風の正統な近代建築、いわば白く輝く“長方形のプリズム”^(注10)としての住宅の成立」というものであつた。

1) 民屋としてのピュアなコルビュジェ建築の実現

コルビュジェのアトリエで坂倉が修行をしたのは、1931年から36年。既に「近代建築の5原則」に基づく一連の住宅の試みが歴史的名作『サボア邸』(1931)に集大成し、次の新しいテーマ；景観／環境や粗い空間／素材への関心としての『エラズリス邸計画』(1930発表)や『マテの休暇の家』(1935／坂倉担当とされる)が作られてゆく時期である。当然『飯箸邸』のランドスケープデザイン、建築／空間構成には、『シトロアン住宅』(1920年代／図3)から『エラズリス邸計画』(前出／図4)へ到る一連のコルビュジェ住宅の直接の影響または引用が感じられるのである。

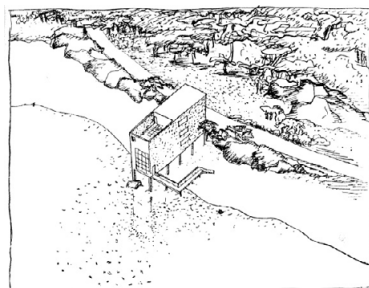


図3 シトロアン住宅
MAISON «CITROHAN» 1922-1927
Une villa au bord de la mer (Côte d'Azur)
／コルビュジェ全作品集 vol.1より

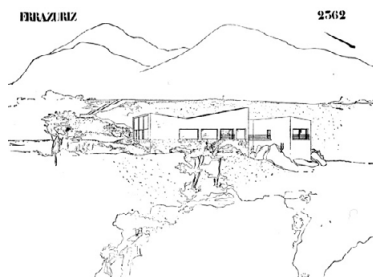


図4 エラズリス邸計画
MAISON DE ERRAZURIZ, AU CHILI 1930
Vue d'ensemble／同上 vol.2より

ここで『飯箸邸』の正確な設計開始時期／竣工時期は特定できないが、39年パリから凱旋帰国し、事務所を設立したての前途洋々たる若き建築家・坂倉にとって、それは恩師の家といういきなりの大仕事^(注11)にあたり、敬愛する建築の師；コルビュジェの新しい理論と実践の日本に於ける展開を素直に試みたはずである。しかもそれは当時の興国産業振興としての新しい民藝運動に刺激を受け、時代に相応しい「國民住居」の創出を喫緊の課題として積極的に意識する「開戦前後の国粹的気分が高揚する」坂倉(新建築；前出)にとって、本格的な“民屋を建てるすさまじい心がまへ”としての白く整形な直方体；“長方形のプリズム”であつたのである。

2) いわゆる「民家風モダニズム住宅」をめぐる

いわゆる「民家風モダニズム住宅」という長閑な表現の住宅作品の一事例として括られがちな『飯箸邸』はしかし、白く整形な直方体を基本形とし、軒や庇のシャープなディテールとシンプルでバランスのよい開口をもつ外観意匠、高天井／シューボックス型の居間・食堂空

間と中2階の寝室や庭に張り出した茶の間(和室)からなるシンプルで豊かな内部主空間など、その研ぎ澄まされた各部の構成や表現に、むしろ初期コルビュジェ住宅／思想の再現への強い指向が感じられる。

ところで、1940年設立のアトリエに入所早々の若き担当者西澤文隆や駒田知彦によれば^(注12, 13)、当初この住宅の屋根はいわゆる「バタフライ型」で計画されたものであつたとされる。そのことや主空間の開放的な大開口の取り方などから、原型をレーモンドの『軽井沢の別荘／夏の家』(1933／写真8)やそのまた原典である『エラズリス邸計画』に見ることも出来るが、坂倉は、8割方出来ていたとされる設計の過程で、出征を前にした最初の担当者西澤の思いを超えて自ら「偏芯した切妻／大屋根」に変えている。その建築家の真意は必ずしも現在明らかではないが、「日本に多い雨の横降りを防ぐのに必要な庇のおさまりが悪いから」、「バタフライは日本の風土に合わないから」などの理由からと伝えられている(前出^{注12, 13})。しかし坂倉にとって、「バタフライ型」であれ「切妻大屋根型」であれ、コルビュジェの実現を前にしてはさして大きな問題ではなかつたのである。結局熟慮の末、コルビュジェやレーモンドの小屋裏を露したワイルドな主空間よりも施主に相応しい構成的でしかも満洒な直方体のそれが獲得でき、主室小屋裏と寝室の中地下に30坪統制下のもとでの余剰空間の可能性を担保するという設計上の合理性を見出し、それまでの平面、断面をそのままに「偏芯切妻大屋根」を採用したと思われる。つまり『飯箸邸』の場合、そのイメージは「3寸5分勾配の直方体」としての民家風だったのである^(注14)。

4. 実測を通じて確認された新しい事実——数々の技術的な工夫

ところで『飯箸邸』は以上のように真正な近代建築と捉えるべきものでありながら、優れて日本の伝統木造建築技術や坂倉特有の日本の美意識に裏打ちされていると見ることが出来る。しかしそれは時勢に対する秋波というより、明治、岐阜の豊かな造り酒屋に生まれ育まれた資質；常に本当で最高のものを目指して妥協を許さぬ文化的DNAから来るものである。この建築家の穢れを知らぬ純粋さが、戦時制限下の住宅とは思えぬほど贅沢で、高品質な「モダニズム住宅『飯箸邸』のもうひとつの特質」：“住むための機械”を形作っているのではないだろうか。そしてそれが当時最高の建築技術^(注15)に裏打ちされ実現



写真8 軽井沢の別荘／夏の家 「自伝A.レーモンド(鹿島出版会)より

しているのである。私たちの解体を含む実測調査から確認され、新たに明らかにされた数多くの技術的工夫が、これまでの『飯箸邸』にまつわる専ら限られた資料や歴史解釈による説明、「時局に対応した民家風木造モダニズム住宅」のイメージに対して、新たな光を当てることになるのである。その主な点は以下のとおりである。

- 1) 玉川等々力の眺望の開けたロケーション（郷土資料や古地図に見る限り玉川全圃耕地整理として区画整理された新興住宅地と国分寺崖線上の文化人の風流な別荘地の接点）を持ち、矢沢川が崖線を深く侵食する西側の等々力溪谷に接し、南北に長い600余坪の恵まれた敷地の真ん中（棟の中心が正しく敷地芯に一致）に、溪谷に張り出し、真北に完全に直交する向きに配置された「直方体」である（図5、6／写真9）。
- 2) 主構造は折置組みによるまったくの伝統的な木造軸組からなるものである（図2／写真7）。しかしそれは、あくまでも全体の形体や空間を前提とし、その意匠の特徴を忠実に実現しサポートする

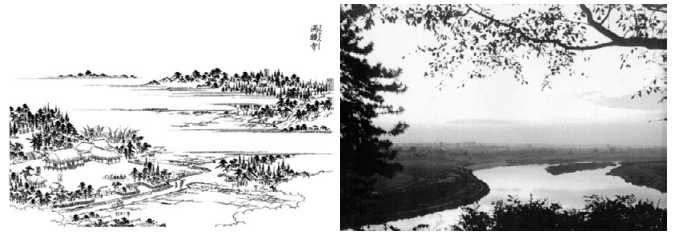


図6 「江戸名所図会」より万願寺 写真9 多摩川台公園からの眺望（万願寺は等々力駅北側の寺） 「多摩川誌」より

半ばアクロバティックともいえる大工棟梁の経験的技術である。それは主空間と庭をつなぐ極めて開放的な軸吊り框格子戸の機構、垂木を使わず巾170×厚38の杉本実厚板により大きく跳ね出された（出800、呑み込み1,000の天秤構造の）スレンダーな軒、外形直方体からはみ出しながら組み込まれた茶の間（内法平面寸法3,081×3,072のアウトスケールの4畳半和室）まわりの架構など、控えめながら高度な技術的工夫に満ちている。また屋根跳ね出し隅部には鉄骨アングルによる補強も行なわれている。

- 3) 『京三』の刻印のある「六四瓦」（64枚／坪；現代のものより小さく緻密。京都産か尾州産か特定されていない。地組みし擦り合わせをしてから葺かれたという）、暖炉やテラスに張られた大型で分厚い（600×775×厚28～55）「磨き仙台石」、居間・食堂の胡桃材／台形断面の独立柱やチーク厚突き積層フローリング材による精緻な寄木床、木摺に（1年程枯らしたとされる）モルタル中塗り下地の内外漆喰壁など厳選され、吟味された材料や入念な施工から、戦時統制下では考えにくい上質の凝った建築である。
- 4) 茶の間と居間・食堂には床暖房が設備されている。荒床下根太間

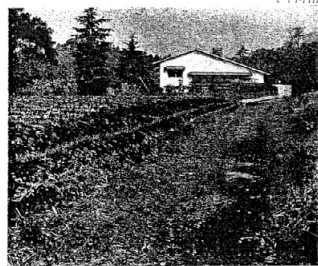
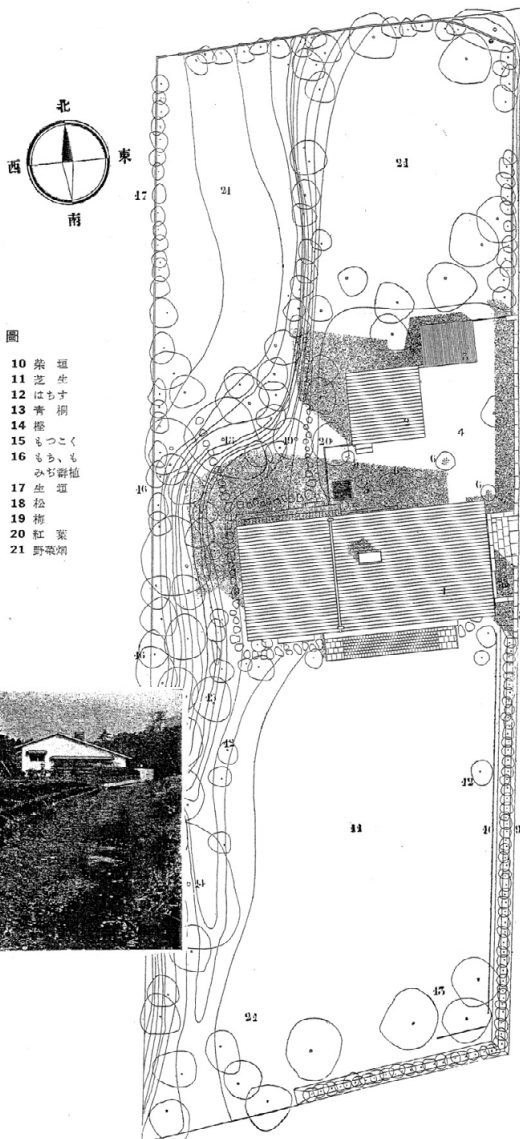


図5 配置図 「新建築」（前掲）より

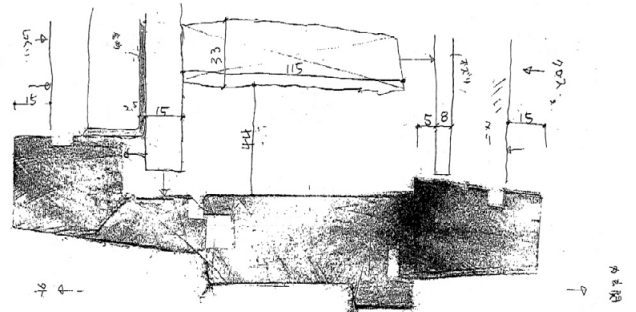


図7 北側出入口枠（フロッタージュによる断面の記録）



写真10 北側出入口枠（サンプリングされた部材）

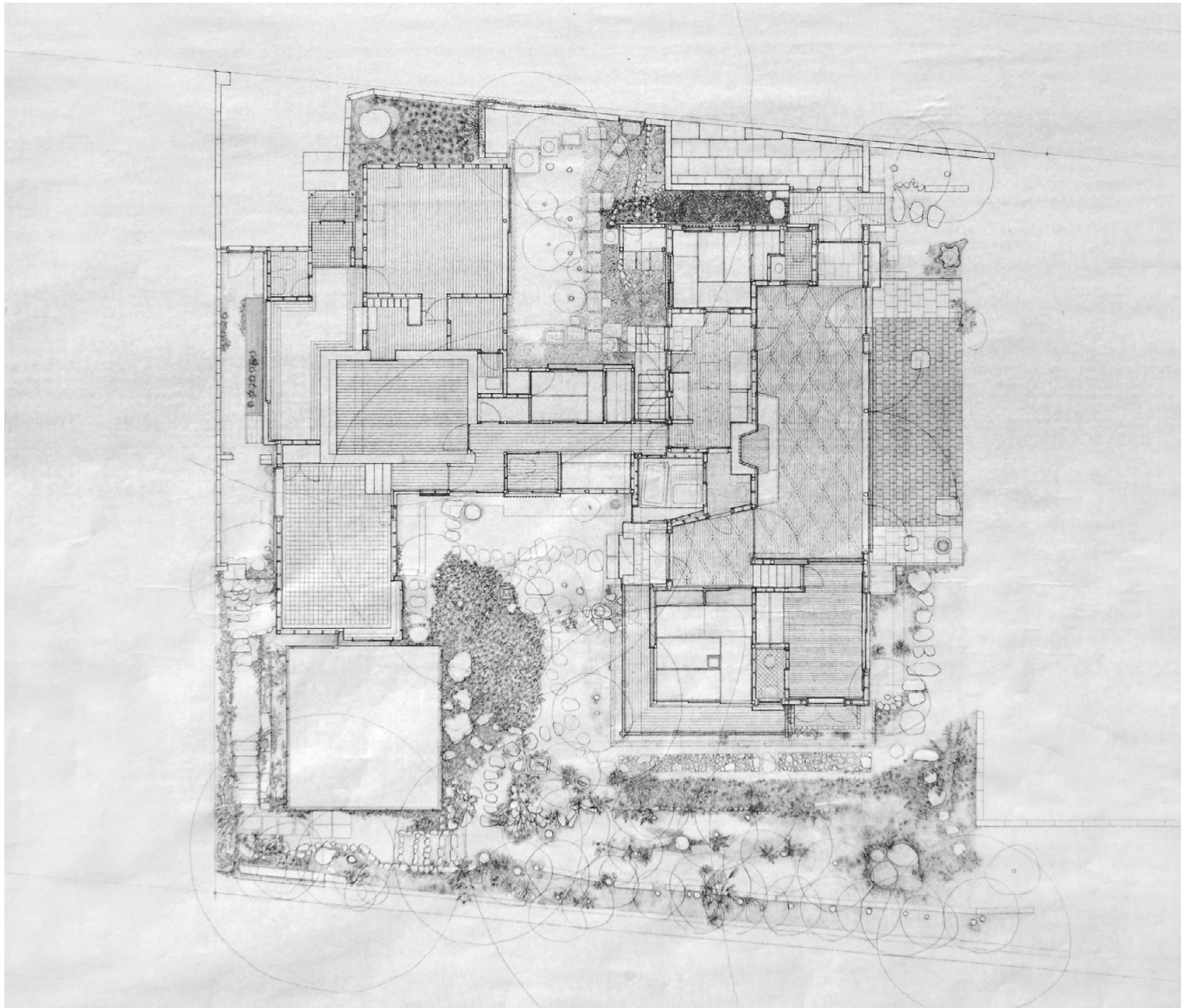


図8 実測に基づくドローイング；「平面図」 (今泉邸／2度にわたって増築された旧飯箸邸) /金澤良春 画

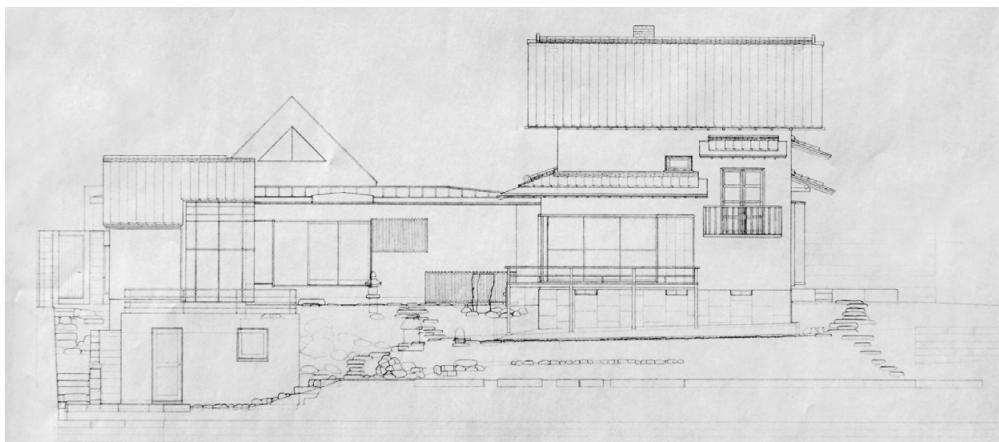


図9 実測に基づくドローイング；「西立面図」 (同上) /金澤良春 画

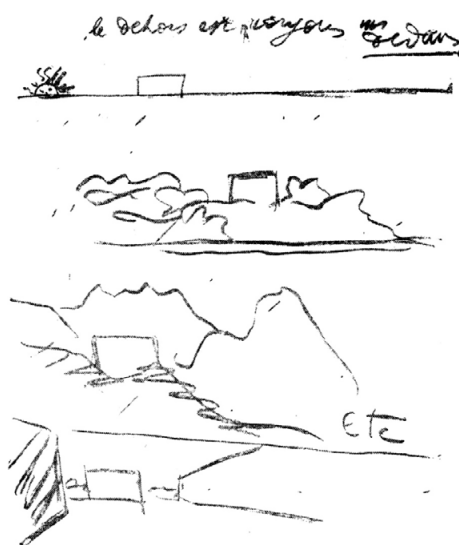
に38φピッチ225の鉄管を布設、初殻を充填し、地下の石炭ボイラーを熱源としている。(それは雪見障子一重の和室や高天井／ガラス張りの居間・食堂の新しい居住性を保証する、現代でも先進的な輻射暖房の温熱環境理論をマスターしていたのであろうか。)

またこのボイラーに加えて、暖炉、さらに台所のレンジの排気が木構造を貫通するコンクリートの煙道となり、瓦屋根の上のレンガタイル張りの直方体の集合煙突となって、緩勾配瓦屋根のスカイラインを異化している。

- 5) ランドスケープ、造園から見た『飯箸邸』について、実測調査からの明確で新しい知見を示すことは困難である。解体時まで60年余の時を経た『飯箸邸』は、その周辺環境も、住宅自身も大きく変貌していたからであるが(図8, 9), 「新建築」(前出)に見る限り建物直近や茶の間まわりに庭園化の意思(戦時統制下では高価なものであったろう飛び石や井筒、砂利庭や庭木の記載がある^(注16))は感じられるものの、総体的には芝生と畑の「田園」の景観を基調にし、等々力溪谷から多摩川、丹沢／富士山の眺望と国分寺崖線の濃い森影を借景にした大まかな風景式庭園とでも呼べるものであろう。それは堀口捨巳の「草庭」や飯田十基の「雑木庭」などと明らかに質の違うものである。それは、「贅沢は敵」という当時の日本国中の風景への自然な親和なのか、バリ郊外のシトロアン住宅の田園景観へのあこがれなのか?あるいはその両方なのかもしれない。

5. まとめ

- 1) 第3の方法としての移築再建による「活用的保存」の有効性と、「解体を含む実測調査」による建築の実体把握／記録に基づく建築／空間解釈の更新の可能性と必要性が確認された。
- 2) 『飯箸邸』は、単なる「民家風」住宅ではなく、優れて「初期コルビュジェ住宅に見られる白い直方体」を理想とするものであり、坂倉準三が考える近代の「國民住居」である。



“家—長方形のプリズム”を説明するコルビュジェのスケッチ

- 3) 木造モダニズム住宅『飯箸邸』は日本建築の伝統技術、坂倉特有の資質と美意識により成立した極めて高水準で豊かな建築／住宅作品である。

謝辞 この論文は、「旧飯箸邸記録と保存の会」による飯箸邸保存活動の概要と、そこから得られた知見の一部を速報したものである。本論文作成にあたり、多くの方の協力を頂いたことを謝して記す。

特に、今泉家、坂倉竹之助氏、たくさんの実測参加者の方々に改めてお礼を申し上げます。

注

- 1) 例えば『近代建築を記憶する／松隈洋／建築資料研究社、2005年』、『現代建築の軌跡／新建築1995.12臨時増刊』などには飯箸邸の最小限の記述が見られるものの、『日本の近代建築・その成立過程(上下)／稲垣栄三／鹿島出版会』、『日本の近代建築(上下)／藤森照信／岩波新書、1993年』、『(新版)図説・近代日本住宅史／内田青蔵＋大川三雄＋藤谷陽悦＝編著／鹿島出版会、2008年』などこのジャンルのほとんどの著書には触れられていない。
- 2) 「旧飯箸邸記録と保存の会」：坂倉OB、現役スタッフを中心とする『飯箸邸』の記録と保存の活動を目指す任意団体。コアメンバーは瀧川公策、篠田義男、藤木隆男、金澤良春、藤木隆明、萬代恭弘、佐藤由紀子、北村紀史の8名。
- 3) 坂倉はバリ万博日本館の特徴として、「一. プラン平面構成の明快、二. 構造の明快、三. 建築構成要素(構造材)の自然美の尊重、四. 建築と建築を囲む自然(環境)との調和」を挙げている。〔「現代建築」1939.6〕
- 4) 「坂倉準三設計『旧飯箸邸』について考える緊急シンポジウム」2006.9.15 工学院大学／パネラー：山口廣、篠田義男、松隈洋、山本想太郎
- 5) 那須のリゾート倶楽部、杉並の神社、伊賀上野の寺院その他への移築が検討されたがいずれも実現しなかった。
- 6) 坂倉竹之助；1946年東京都生まれ／1979年坂倉アトリエ設立／2002年～坂倉建築研究所代表取締役／坂倉準三の長男。
- 7) 小屋裏換気口、居間大扉など建具／暖炉／フローリング材、和室造作などは優先してオリジンが再利用されたが、エントランス位置、上下足の利用区分(特に和室)、構造材、空調方式、瓦、内部しっくい壁ほかは新規に製造され再建、または改変されたものである。しかし総じて外形や内部主空間は忠実に再現されている。(新建築2007.12)
- 8) 記録と保存の活動に関わった延べ人員は、内外調査169人・日、解体調査89人・日、記録撮影28人・日／合計286人・日。また工事監理サポート175人・日。
- 9) 団 伊能：男爵・団琢磨の長男／1892年生まれ／東京大学文学部美学科助教授、国際文化振興会理事、貴族院勅撰議員／参議院議員／プリジストン自動車社長など。門下生に坂倉のほか、富永惣一、今泉篤男など。
- 10) “長方形のプリズム”：『井田安弘・芝優子訳：プレジジョン(上)、SD選書185／鹿島出版会』。コルビュジェのプエノスアイレスでの講演第3回『全的建築・全的都市計画』(1929)の中で、「家—単純な長方形のプリズム」を平野、丘陵地、野生的山麓などに置いた場合の例を示し、環境の中での建築のあり方を論じ、様式より環境との関係の重要性を説明している。
- 11) 数少ない設計原図のうち立面図には1940年7月、解体現場から得られた上棟棟札には「昭和拾五年十月拾参日之建」の日付が見られる。
- 12) 西澤文隆：「坂倉先生と私の間 裏から見た坂倉準三」(「建築」、1970年)
- 13) 駒田知彦：「坂倉準三の足跡とモダニズムの再評価」(建築文化講演会集／野安製瓦株式会社、1997年)
- 14) その後の主な「バタフライ型」は、「高島屋和歌山支店1948」、「寺田甚吉邸1952」、「東京銀行丸子クラブ1953」など5作品、一方「大屋根型」は、「クラブ関東1951」、「室賀国威邸1954」、「塩野孝太郎邸1955」、「白馬東急ホテル1959」など7作品がつくられている。
- 15) 内田祥哉東大名誉教授によれば、日本の木造建築は昭和戦前期に歴史上最高度の技術レベルに達したとされる。
- 16) その後の住まい手の改変により、実測時には延べ段、灯籠、蹲など「茶庭の露地」の性格を強めていた。